

キリスト教における対世俗の姿勢 —カトリックの立場から—

マイケル・T・シーゲル
(南山大学総合政策学部 教授)

(和文要旨)

西洋において、世俗化は教会の影響力の衰退を意味する。啓蒙時代には、人間や理性に対する肯定的な考え方が普及し、教会や信条などによる余計の束縛を取り除けば社会を改善していけると理解されるようになった。それは一種の現世的救いを意味する。英語の“secularization”という単語の語源である“saeculum”は時間に関連する言葉であり、来世と現世の対比に使われる単語である。「Secularization」とは、来世から現世に注意を移すことを意味する。カトリック教会は世俗化の流れに対抗したが、歓迎する考え方も教会にあった。教会がより純粹になれると考えられていた。世俗化の現世的な視点は教会にも影響し、救いの概念に変化が見られ、来世だけでなく、現世においても、愛の絆によって救いが可能であると理解されるようになった。この動向は19世紀の社会的カトリシズムから始まり、解放の神学にいたるまで発展した。

(SUMMARY)

In Europe, “secularization” refers to the weakening influence of the churches. During the Enlightenment, more positive notions were developed regarding the human being and human reason. The notion developed that, by removing inappropriate religious and other inhibitions, human beings could develop themselves and improve society. This led to the emergence of a this-worldly understanding of salvation. The English word “secularization” is derived from the Latin “saeculum”, a word with a meaning related to time and used to refer to time as the opposite of eternity. Secularization implies a focus on this world rather than the next. It means transferring attention from the next world to this. While the official Church opposed secularizing trends, many in the Church welcomed them. The influence of secularization led to changes within Christianity. Salvation came to be seen as at least partly possible in this world and the Church came to be seen as having a mission in relation to this world as well as the next. This trend begins with the Social Catholicism of the 19th century, and leads to the ideas of Liberation Theology.

1. はじめに

世俗化という現象は近代から現代にかけての世界を特徴づけるものである。今回の論題はキリスト教における世俗化のことである。つまり、世俗化がキリスト教、そして特にカトリック教会に何をもたらしたのか、教会がどのように影響されたのか、教会自体において世俗化の現象がどのように現れたのかということである。糸口として、ヨーロッパの社会において教会の影響がいかに衰退したかを示す二つの例を挙げることにする。

真冬の決闘

1077年1月に教会の、そして特にローマ法王の力を明確に示す事件が起きた。教会と皇室の間に司教の任命権をめぐる生じていた対決の終結にはならなかったが、その対決における教会の勝利を象徴する事件となった。当時のローマ法王はグレゴリウス7世で、皇帝はハインリッヒ4世である。司教の任命権をめぐる対立の中で、ハインリッヒが侮辱的な手紙をグレゴリウスに送り、グレゴリウスは怒り、ハインリッヒとその一味の司教たちの破門とハインリッヒの解任を宣告した。教会の歴史家ボーケンコッターはハインリッヒの反応を次のように描いている。

絶望的状况に立たされたハインリッヒは、……妻や幼い息子に僅かな供を連れて、ほとんど通行不可能なアルプスの冷たい雪と氷に挑み、1077年1月、カノッサにある公妃マティルダの城下にたどり着いた。そこには、ドイツへの旅の途中にあるグレゴリウスが滞在していた。教皇の赦免を乞いながら、三日に渡り、苦行衣を着て、裸足のまま、雪深い城の前庭に佇むハインリッヒの姿がそこにあった。グレゴリウスの方も、恐るべきジレンマから何とか逃れようと、苦悩を重ねていた。彼の政治的直感は、この落ちぶれた君主を信用してはならず、……また、彼が握っている最上の切り札を投げ出してはならないと、彼の心に呼びかけていた。しかし、かれの司祭としての良心が勝ちを占め、気の進

まないまま、ハインリッヒに赦しを与えた¹。

対立は続いたし、ハインリッヒ自身は自分の持っている恐怖よりは、側近および味方となっていた司教たちの恐怖感のために屈服したのである。しかし、それでも、ここには、教会、そして特にローマ法王に絶大の力があつたことを明確にする出来事がある。

欧州憲法とカトリック教会

これに対して現在の教会の影響力はどの程度のものだろうか。2002年から2004年にかけて、ローマ法王ヨハネ・パウロ2世を中心に、欧州憲法草案の作成に当たってヨーロッパにおけるキリスト教の伝統と遺産に、欧州連合が触れるよう教会が繰り返し依頼した²が、この要望に応じてもらえなかった。その憲法草案は最終的に採択されなかったが、それでも、この事件から、ヨーロッパの最大の政治的権力を握るところから、かつての地位への言及さえももらえないところまで教会の影響力が衰退したことが窺える。

一千年も離れた二つの出来事なので、比較するのは妥当ではないかもしれないし、教会が欧州憲法の作成に影響が一切なかったわけでもない³。しかし、ローマ法王の前で屈服する11世紀の皇帝と、21世紀に欧州憲法作成者に「我々を忘れないで」と無能に叫ぶ教会の姿はあまりにも対比的で、教会の地位の著しい格下げを示していることは間違いないであろう。

教会の影響力の衰退

2001年に発行された『World Christian Encyclopedia』によると、宗教を一切持たない人は、世界規模では、1900年に0.2%だったのに対して、1970年には18.9%まで伸び、共産圏の崩壊でその数が幾分か少なくなり、2000年には15.2%になってい

¹ トマス・ボーケンコッター著、石井健吾訳、『新世界カトリック教会史』、エンデルレ書店、1992年、125頁。

² たとえば *Message of John Paul II to the European Study Congress on the Theme: "Towards a European Constitution?"*; http://www.vatican.va/holy_father/john_paul_ii/speeches/2002/june/documents/hf_jp-ii_spe_20020622_costituzione-europea_en.html 参照。

³ カトリック教会と欧州憲法について、*Catholics For a Free Choice - Europe, Article 52 of the European Constitution*; <http://www.seechange.org/what's%20new/article52briefingreport.htm> 参照。

た⁴。キリスト教に限って言うと、発展途上国では増えている傾向にあるが、西洋では、キリスト教から離れる人は、平均して年間 182 万人となっており、特定の宗派に所属していた人がその宗派から離れるのは 222 万人で、教会に積極的に参加していた人でその参加をやめるのは 277 万人となっている⁵。こういう統計は推定であろうが、間違いなく 20 世紀の動向を示している。

1990 年代の初め頃まであまり世俗化の傾向を見せていなかったアイルランドでさえ、2002 年に行われた世論調査は「教会の道德に関する権威への信仰の激減」⁶を明らかにした。この世論調査によると、重要な道徳的決断において教会の教えに従おうとするのは 21% (18 歳から 35 歳までの若い年齢層ではたったの 7%) にとどまり、日曜日の礼拝 (ミサ) に参加する率は 10 年間で 85% から 66% に落ちたのである⁷。66% がミサに参列し、21% だけが重要な道徳的決断において教会の教えに従おうとするということは、ミサに参加する人の中でも 3 分の 2 を上回る割合が重要な道徳的決断 (避妊、中絶、離婚、婚前交渉を意味するに違いない) において教会の教えに従おうとしないことを意味する。これは教会に参加している人でさえ、かなり冷めた目で教会を見ていることを意味する。また、アイルランドにおける教会の影響力の後退は、1996 年に行われた、離婚に関する国民投票によって一段と明らかになった。教会の強烈な反対にもかかわらず、0.6 % という僅かな差ではあったが、1937 年の憲法に含まれていた離婚禁止が改正され、離婚が解禁となった⁸。(アイルランドにおける教会の影響力の衰退の背後には、カトリック司祭の性犯罪などをめぐる多数のスキャンダルが教会の信頼性に重要な打撃を与えていたことがある⁹。)

2. 世俗化とは

「世俗化」の意味の曖昧さ

⁴ David B. Barrett, George T. Kurian, Todd M. Johnson, *World Christian Encyclopedia: A Comparative Survey of Churches and Religions in the Modern World*, New York : Oxford University Press, 2001, p. 3.

⁵ Barrett, Kurian, Johnson, *World Christian Encyclopedia*, p. 5.

⁶ Kieron Wood, *Catholic Only in Name?* Catholic World News, <http://www.cwnews.com/news/viewstory.cfm?recnum=21043>.

⁷ Kieron Wood, *Catholic Only in Name?*.

⁸ Christine P. James. *Céad Míle Fáilte? Ireland Welcomes Divorce: The 1995 Irish Divorce Referendum and the Family (Divorce) Act of 1996*. *Duke Journal of Comparative and International Law*, 8, pp. 175-228, <http://www.law.duke.edu/journals/djcil/archive.html> 参照。

⁹ Christine P. James, *Ibid.*

明らかに、政治においても、社会においても、そして各個人の考え方や精神においても、教会の影響力は著しく減少している。「世俗化」という言葉はその影響力の衰退を指している。「世俗化」は特定の社会現象を指してはいるが、その現象の性質を明確にしているとは決して言えない。つまり教会の影響力の衰退が何を意味するかを明確にしていない。先ほど述べたグレゴリウスとハインリッヒの対決の例をとっても、教会がその時代の権力を失ったことは本当に世俗化というべきなのか、それともそのような権力をもっていたことこそが教会自体の「世俗化」というべきか、議論ができそうなのである。

世俗化に関するさまざまな見方

世俗化に関する宗教家の立場は必ずしも否定の一点張りでない。よいものとして捉える場合もあり、悪いものとして捉える場合もある。世俗化によって宗教が政治的関わりから解放され、したがって宗教のために新しい道が開かれるという考えで、世俗化を肯定する思想もある。また、一般社会が宗教からの自律を得たことは、社会の発展のためになったと肯定的に見る人もいる。

例えば、米国のカトリック大学発行『New Catholic Encyclopedia』では、「secularization」（世俗化）は「人生の特定な場面において、宗教的な理念、習慣および組織に非宗教的なものが入り替わる社会的、文化的プロセス」¹⁰と定義されているが、これは宗教がその世俗的な役割を失うと同時に、世俗社会が宗教的な役割を失うことを意味する。したがって、世俗社会がより世俗社会らしく、宗教もより宗教らしくなる意味になっている¹¹。

この捉え方はカトリック教会には広く支持されている。現在のローマ法王ベネディクト 16 世は、現代世界を特徴づける世俗化が「科学および社会制度のための[宗教からの]自律を確保しただけでなく、あまりにも多くの場合人間の超自然的尊厳の擁護と人間の生命への尊重が放置されるにいたるまでもこの世の現実と創造主の関係を消し去るものとなっているのである」¹²と訴えている。確かに、ここに、あ

¹⁰ "A social and cultural process by which nonreligious beliefs, practices, and institutions replace religious ones in certain spheres of life." *New Catholic Encyclopedia*, Catholic University of America, vol. 13, p. 38.

¹¹ *New Catholic Encyclopedia*, vol. 13, p. 38.

¹² *Address of His Holiness Benedict XVI to the Participants at the 20th International Conference Organized by the Pontifical Council for Health Pastoral Care on the Theme of the Human Genome*; http://www.vatican.va/holy_father/benedict_xvi/speeches/2005/november/documents/hf_ben_xvi_spe_20051119_pastorale-salute_en.html 参照。

る種の世俗化に対する懸念があるが、「科学および社会制度のための自律を確保」する意味での世俗化を受け入れる姿勢が見られる。

世俗化が歓迎されるもう一つの場合は多数の宗教が共存する国においてである。こういう場合には、世俗化は、政府が特定の宗教との関係を持たないため、宗教の自由を保障するために不可欠だとされている。したがって、たとえばインドのキリスト教では、特定の宗教が優遇されることがないという意味で、世俗化はとても重要視されている。

そういった肯定的な捉え方に対比的で、あまり明確な定義や分析がなされないままの、世俗化に対する批判的な捉え方もある。宗教団体のアイデンティティを固めるために、外部の世界に貼られるレッテルとして使われることもある。また、主義主張において利用されることもある。たとえば、米国のカトリック思想家ジョージ・ワイゲルは、イラク攻撃に対するヨーロッパの否定的立場や、京都議定書に関してヨーロッパが米国と違う立場をとっていることを含めて、ワイゲルの立場から見たヨーロッパのすべての問題点をヨーロッパの世俗化に起因するものとする¹³。

なお、最近「世俗化否定論」もある。つまり、今の世界の特徴は世俗化ではなく、宗教の再台頭であると論じられている。たとえば、1960年代に世俗化を主唱していたピーター・L・バーガーは2002年に「今日の世界は、ある特定の例外を除けば、過去のどの時代にも負けず猛烈に宗教的であり、あるところではむしろ一層宗教的になっている。したがって、『世俗化理論』といわれている主張をする歴史家や社会学者の一連の文献は根本的に間違っている」¹⁴と論じている。しかし、現在起きている宗教の再台頭が世俗化の逆方向のものであるかどうかはバーガーがいうほど定かではない。1965年に発行された『世俗都市』において、ハーヴェイ・コックスはすでに新興宗教の台頭に基づいたこのような「世俗化否定論」を取り上げ、新興宗教の台頭について「これらの現象も、現代世界の中にある流れの速い世俗化の風潮から切り離して理解することはできない」¹⁵と述べている。つまりこれらの現象は世俗化を否定するものではなく、世俗化の流れの一部であると捉えている。

¹³ George Weigel, *Their European Problem... and Ours* (The Third Annual William E. Simon Lecture), Ethics and Public Policy Center Homepage; http://www.eppc.org/programs/foreignpolicy/publications/programID.17,pubID.2062/pub_detail.asp 参照。

¹⁴ Ronald Inglehart and Pippa Norris, *Sacred and Secular: Religion and Politics Worldwide*, Cambridge: Cambridge University Press, 2004, p. 1.

¹⁵ H.コックス著、塩月賢太郎訳『世俗都市』、新教出版社、1968年、14頁。

3. 世俗化の過程

啓蒙時代の産物

西洋では、世俗化は啓蒙時代の産物として認められている。啓蒙時代の思想家は、以前の世界を宗教による迷信の暗黒と見て、理性に頼ることによってその暗黒から脱出できると考えた。啓蒙時代は、ヴォルテールの思想に見られるように、宗教改革後の宗教戦争に対する反発を含むものであった。またコペルニクス思想の否定やガリレオに対する弾圧に見られる教会の権威主義に対する反発もあった。それに、コペルニクス、ガリレオ、ニュートン、デカルトなどの影響により、人間の理性の可能性への信頼が高まっている時代でもあった。これまで絶対的な従順を要求できた教会は、これから理性による批評の対象となる。神からの啓示、神から与えられた知恵を持っているために学問を導く立場にあるという自負心を持っていた宗教および宗教家は、啓蒙時代以降、理性による研究と批評の対象になったのである。宗教、信仰、教会ではなく、理性が導くものとなった。教会歴史家レーヴェニヒは「生活の仕方は、日常のひとつひとつの点にいたるまで、信条による束縛と境界設定とから自由になった」と啓蒙時代のことを描いている¹⁶。また、ボーケンコッターは啓蒙時代について次のように語っている。

「ヨーロッパの思想界に対する最も大きな刺激は、もはやキリストの諸教会の内部から出てくることはなかった。ヨーロッパは、違う道を歩み始めていた。……啓蒙思想家……は、これまで教会の独占的領域と思われていた学問の分野を余すところなく扱うと同時に、人間、社会、歴史、道徳、宗教などの性質を含む、まったく違った宇宙観を提示した。彼らが作った世界観は、国家と社会を教会の規制から解放し、大規模な世俗文化の興隆を図るものだった。彼らの原則は、もはや聖書や教会から引き出されるのではなく、理性や社会経験を通して自由に到達したものだ」¹⁷。

啓蒙時代には教会の影響力に打撃を与える側面が少なくとも三つあったと言えよう。一つは、それまで絶対的な権威を握っていた教会が批評の対象になった（も

¹⁶ W. v. レーヴェニヒ著『教会史概論』、日本基督教団出版局、1983年、370頁。

¹⁷ ボーケンコッター著、『新世界カトリック教会史』、281頁。

もちろん、宗教改革はある程度この現実をすでに作っていた) ことで、もう一つは今の引用でボーケンコッターが述べたように教会の特有な領域であった思想、哲学、道徳などに関して教会と関係なく議論、研究、思考が進められるようになったことである。三つ目は啓蒙時代に生まれた思想そのものである。たとえば、ルソーの「気高い未開人」の考えを例として取り上げよう¹⁸。「気高い未開人」という考えは人間の自然な姿をよいもの、高貴なものとし、それをゆがめてしまうのは社会であり、文明であるとする¹⁹。人間の本来の姿が高貴であるということはキリスト教も教えてきた。そのためにルソーの考えは割合に教会によく受容された。しかし、ルソーの「気高い未開人」という考えには教会の教えに深く相反する側面もある。それは悪というものがどこから生じるかということである。教会は、あくまでも悪が人間の罪に起因し、人間の性質が善でありながら、罪によりその性質にゆがみが入り、人間はもはや自らの力では真理を悟り、救われるということはないと教える。罪によってゆがんだ理性が真理を悟るには、神の啓示と教会の権威が必要であり、また罪の許しのために教会が必要だと教えていた。従って、人間の悪や社会における悪が個人の罪に起因するより、社会に起因すると考えられるようになれば、教会が教会の必要性を主張するために使っていた理論はその根底から揺さぶられる。

人間に対してこのような肯定的考え方が普及し、人間から余計の束縛（教会、信条による束縛を含む）を取り除くと、人間は社会を改善していけるという考えも普及した。これは、人間が自分の力で救いに達成することができるということになる。そしてここから進歩という概念も生まれる。進歩という概念はさまざまな形で 19 世紀の思想に現れた。ヘーゲル、マルクス、スペンサーなどにおいて多くの違った形で現れたが、人間社会の発展により、何らかの形の地上での救いが可能であるという考え方が 19 世紀の思想を貫いていた。教会が約束する来世の救いより身近だと思われていたとしてもおかしくはない。コント、スペンサー、マルクスの思想において、進歩という概念と世俗化は関連づけられていた。人類の発展により、宗教が不要となり、なくなっていくということは歴史の必然的な過程と理解されるようになった。

¹⁸ これに関して、拙著「21 世紀における人類に求められる価値基準を考える」でより詳しく述べている。浜名 優美・山田望編『人間の尊厳のために』南山大学、2006 年、75-103 頁参照。

¹⁹ Jean Jacques Rousseau. *A Discourse Upon The Origin And The Foundation Of The Inequality Among Mankind*; <http://www.bartleby.com/34/3/2.html> 参照。

教会は守勢に立たされた

宗教家はこの発展に対して否定の一点張りではなかった。幾つかの考えは受容されていたし、自由化や人権の尊重への動きを教会が支持すべきだと考える人もいた。これは地域の教会（小教区）で働く司祭たちには広く持たれていた考えである。たとえば、ボーケンコッターが指摘するように、フランス革命の初め頃、多くのカトリック司祭は「革命とその社会的再生の約束に深く関わっていた」²⁰。南米でも独立を推し進めるカトリックの司祭は多かった。しかし、司教など、地位の高い聖職者は貴族の階層の出身者は多くて、新しい動きに反対し、バチカンも脅威とみていた。したがって、教会が組織として動いたとき、自由化に反対する立場をとった。ボーケンコッターは、次のように述べている。

「この近代性の興隆に対するカトリック教会の反応は、ほとんど防禦的で否定的なものであった。というのも、自分たちの領域でこのような自由思想家と会うことは滅多になく、会ったとしても、その考えの処罰とか暴力による弾圧に訴えるのが普通だったからである。その結果は、教会から世俗文化を引き離し、近代カトリシズムを今日に至るまで特徴づける、戒厳令下にある心理状態を生み出すことになった」²¹。

ここで「戒厳令下にある心理状態」と翻訳されているのは、英語では「**siege mentality**」という表現であり、包囲されて攻撃を受けているという強迫観念を意味するのである。特に 19 世紀の後半になると、思想的脅威と同時に、イタリアの独立と統一のための戦いによって、バチカンは軍事的にも脅威を受けていた。当時のローマ法王ピオ 9 世は、ローマ法王に選ばれたとき、新しい思想に開いた心をもっているという評判があった。したがって、彼の選挙は教会の立場が否定ばかりでなかったことを示している。しかし、ピオ九世は極端に反動的で、教会の中で新しい思想を弾圧し、1864 年に「近代主義者の謬説表」を発行した。この文書は政教分離や宗教の自由を否定し、神の啓示を基としない哲学や理性を邪悪なものとして糾弾し、教会と世俗社会の断絶をいっそう強めた。また 1910 年にピオ十世は「モダニズムに反対する誓い」を発表し、すべての聖職者、司牧者、修道会の上長、そして神学校で教えるすべての教授が誓わなければならないと規定した。「モダニズム」

²⁰ ボーケンコッター著『新世界カトリック教会史』、305 頁。

²¹ ボーケンコッター著『同』、281 頁。

とは教会の保守派が作った概念で、その保守派が反対していた自由化などの思想を指していた。

この時代（19世紀の後半と20世紀の前半）の教会は、できるだけ信徒を世間から守る体制を作ろうとし、その中心となったのは教育施設だったが、教育以外の人生のあらゆる面において教会は世俗社会と並行するカトリック社会を作ろうとした。カトリック病院で生まれ、カトリック学校で勉強し、教会の諸活動への参加を通して教会を社交生活の中心とし、同じカトリック信徒と結婚し、場合によってカトリックがよしとする政党を支持し、病のときにカトリックの病院に入院し、死んでからカトリック墓地に葬られる体制を作り、言葉通り揺りかごから墓場まで信者の生活を保護しようとしたのである。教育施設、病院などは必ずしもこのような擁護を目的として設立されたのではない。おそらく多くは純粋な慈善活動として始まったであろう。しかし、ピオ9世の時代からピオ12世の時代まで、つまり19世紀の後半と20世紀の前半は、教会の強迫観念により、「擁護」も重要な目的となった。この時代の教会は一種の隔離を図っていたし、精神のレベルでは、一時的に隔離に近い状態を達成することができた。

しかしこれは世俗化に対する唯一の反応ではなかった。すでに世俗化を歓迎する姿勢もあったことを述べているが、その姿勢を考察する前に、近代から現代にかけての世俗化が何を意味したかをもう少し詳しく見る必要がある。

4. 西洋（キリスト教）社会における世俗化の特徴

「世俗化」と「secularization」

英語の「secularization」と日本語の「世俗化」とは、互いの訳語として使われるし、基本的に同じ現象を指している。しかし、それでも重要な違いがあるように思われる。対比語、あるいはもっと正確には、語源の単語の対比語を見ればその違いが見えてくる。「世俗化」の場合は「俗」という字が肝心となる。「俗」の対比語は「聖」である。「聖」は英語で「sacred」と翻訳できるが、「俗」とは「secular」というより、「profane」と翻訳したほうが正しい。「聖」は「賢くて、徳のすぐれた人」²²、宗教の道ですぐれていること、また「おかしがたくおごそかなさま」²³

²² 藤堂明保、松本昭、竹田晃編『漢字源』、学習研究社、1988年、981頁。

を言い、「俗」はそのすぐれている性質やおごそかさの対比としての「一般」²⁴を言うのである。ある意味でものの性質を指しているといえよう。

それに対して、「secularization」とはむしろ時間に関連する言葉である。その語源は「saeculum」という語であり、「saeculum」とは「年齢、世代、時代」²⁵の意味であるが、特に宗教関係では「永遠」という言葉の対比語として使われてきた。つまり来世と現世の対比に関わる単語である。したがって、日本語の「俗」および「世俗化」と比べて、英語の「secular」、そして当然に「secularization」という単語は来世と現世という対比に重点を置いている。

そこで、キリスト教における世俗化の特質が表れるといえよう。他の多くの宗教と比べて、キリスト教は来世での救いにかかなりの重点を置いてきている。現世のことはまったく無視されてきたのではない。たとえば、キリスト教でも農夫は雨乞いをするし、キリスト教徒も健康などのために祈る。選手が試合の前に十字架を切って祈るという姿は、オリンピックが開催されるたびに放映される。これは、勝利のために祈っているだろうが、それは言うまでもなく現世的なものである。しかし、キリスト教では、こういうことに重点は決して置かれていなくて、現世的なご利益に重点を置くことはむしろ希薄な宗教心と見られてきた。人間が死んだときに神から審判を受け、その審判の結果により永遠の幸福を得るか、永遠の罰に苦しむか²⁶が決まるのである。来世での救いや地獄での罰はあまりにも絶大なものであり、それと比べて現世での幸せやご利益はちっぽけなものである。このキリスト教の性質は、たとえばダンテの「神曲」の「地獄編」やローマのシスティーナ礼拝堂に見られるミケランジェロの「最後の審判」の壁画に窺うことができる。

最初に述べたグレゴリウスとハインリッヒの対決に見られる王室に対するローマ法王の力は、結局この来世における救いへの信仰（ハインリッヒ自身の信仰ではないが、周りにいる人たちの信仰）によるものであった。どうしてローマ法王がそれだけの服従を強いることができたかという点、破門という権能を持っていたからである。破門された場合は来世での救いに与れなくなり、永遠に地獄で苦しむことになると信じられていた。十字軍の召集にも、十字軍遠征に出ている間に死んだ人に、

²³ 『同』、981頁。

²⁴ 『同』、72頁。

²⁵ 田中秀央著『羅和辞典』研究社、1973年、551頁。

²⁶ カトリック教会では煉獄の概念もあるが、煉獄の場合は最終的に天国に行くので、まだ救いの領域に入る。

死ぬ瞬間での免罪を約束することによって、つまり来世における救いを約束することによって、兵士を募集することができた²⁷。つまり、中世期において教会の政治的権力の基盤となっていたのは、来世に対して人々が恐怖を抱いていたこと、そして教会が来世における救いの鍵を握っていると人々が信じていたことであった。

「Secularization」は現世に重みを置く

そこで、英語の「secularization」の語源の重要性が見えてくる。「secularization」とは、結局、来世から現世に、aeternitas（永遠）からsaeculum（時代、時間、すなわち現世）に注意を移すことである。米国のカトリック神学者ハーヴィー・コックスが言うように「世俗化は、人間が自分の関心をあの世から、この世界、この時代（saeculum）に転ずる時に起こるのである」²⁸。つまり来世における救いのために現世の幸せなどを犠牲にするより、現世における改善を図ることによってこの世における救いを求めることである。上記の通り、啓蒙時代以降のヨーロッパにおける世俗化はまさにこういうものであった。これは必ずしも来世のことを否定する意味だと限らない。しかし少なくとも、現世に重みを置くことを意味する。

5. 世俗化を抱きしめて

カトリックにおいては、世俗化がどういう意味を持つかを把握するには、中世期には来世と現世を分けて前者を教会の領域にし、後者を俗権の領域にする風習があったこと、そして教会がその区枠を逆に利用して来世に対する恐怖を現世的な支配を固めるために存分に使ってしまったという特殊な歴史背景を念頭に置く必要がある。近代から現代にかけての世俗化によって、現世、もしくは現世と来世の関係をどう捉えるかという問いかけが教会に突きつけられたと言えよう。その問いかけに教会がどう対応したか浮き彫りにするために、カトリック教会には、世俗化を歓迎する考え方もあったことにもう少し注目する必要がある。世俗化によって教会が政治などへの関わりから解放され、より純粋な宗教的存在になりうると考えられていたことにすでに触れたが、それと違う意味でも、世俗化を歓迎する風習もあった。

²⁷ 十字軍を召集する、クレルモン教会会議におけるウルバヌス 2 世の演説；Internet Medieval Sourcebook, <http://www.fordham.edu/halsall/source/urban2-5vers.html> 参照。

²⁸ H.コックス著『世俗都市』、14 頁。

現世に関する再考

ヨーロッパの社会における新しい動向（民主主義、階級性の廃絶、労働条件の改善、人権の尊重と擁護など）をよいものとして認めることだけでなく、そのような新しい動向を促進することこそが教会の使命であると論ずる者もいたのである²⁹。教会の中ではそのような思想はしばしば弾圧されたが、弾圧されながらも成長し、教会全体にある程度浸透した。教会全体がこの世への使命を認識するようになり、20世紀において救いの概念そのものに変化が見られた。救いは来世のものだけでなく、現世においても愛の絆を築くことによってすでに救いに与るのだという理解が受け入れられるようになった³⁰。そしてその愛の絆というのは社会的、政治的、経済的、民族的な関係のすべてを含むと理解されるようになった。つまりすべての関係において公正、人間の尊厳の尊重、和解、平和、愛が成立することによって、すでにこの世の中で「神の国」の成立が可能であり、このように現世で始められた救い（神の国）は来世において完成されるという理解である³¹。

このような姿勢は、19世紀の社会的カトリシズムから始まり、徐々に教会に普及した。たとえば、カトリックの社会教説がその間に明確な形を持つものに整えられたこと、ローマ法王の回勅を中心とするバチカンの重要な文献が国際問題や社会問題および教会の社会的使命を取り上げるようになったこと、教会が慈善活動を超えた、そして以前の政治的関わりとまったく違う社会的関わりを始めたことに、その姿勢が見られる。

このような動向がもっとも教会によって受理されるようになったのは、第二バチカン公会議においてである。特に、教会の歴史のすべての文献においてまったく前例のない『現代世界憲章』という第二バチカン公会議の著名な文献³²で、世界における教会の関わりが取り上げられたことは、世界に対するまったく違う姿勢を示すものであった。教会は、対等に、そして対話を持って、教会の外部の世界と付き合い合う姿勢を示したのである。その後、その方針に対する反発も確かにあるが、それで

²⁹ 教会の中のこれらの動きは、たとえば Paul Misner, *Social Catholicism in Europe from the Onset of Industrialization to the First World War* (London: Darton, Longman and Todd, 1991) が詳しく取り上げている。

³⁰ M. シーゲル著『福音と現代—宣教学の視点から』、サンパウロ、2005年、56-76頁。

³¹ 例えば、Pontifical Council for Justice and Peace (教皇庁正義と平和評議会) 著「Compendium of the Social Doctrine of the Catholic Church」(Libreria Editrice Vaticana, 2004年)第2章 参照。

³² 南山大学監修『第2 ヴァチカン公会議公文書全集』、中央出版社、1986年、325-399頁。

もその時期から教会全体において世俗社会や現代世界へ積極的に関わる姿勢を見せるようになった。

1965年、アメリカの神学者ハーヴィー・コックスは『世俗都市』という書籍を出版した。それが当時の教会で広く影響力を持った書である。コックスは世俗化と都市化を関連付けて、両方をよいものとみなした。たとえば、都市化に伴う問題として認識される都市のアノニメティ（回りの多くの人を知らない、多くの知人の素性を知らない、隣に住んでいる人の名前さえも知らないという現代都市の現象）を都市の生活に不可欠のプライバシーと自由を与えるものとして評価する³³。コックスは、教会の本当の居場所は世俗都市の中にあり、その中でその使命を見出すべきだと論じているのである。

少し違う形ではあるが、現世における救いを重視したものとして台頭したもう一つの動向は「解放の神学」という思想である。「解放の神学」はグスタボ・グティエレス著『解放の神学』の出版に端を発しているが、その前からの動向の一つの結晶である。「解放の神学」は、キリストが本当に教えた救いを来世の救いだけのものとみなさず、この世の中で正義、平和などを確立させることによってすでに救いが実現するということを前提とし、その正義および平和を確立するための政治的、社会的、経済的関わりを呼びかけるものである。社会への取り組みのために、社会分析が必要だとされ、最初のうちマルクスの社会分析を採用したということで教会では批判されたが、「開放の神学」が主唱した現世と救いの関連性については、教皇庁を含めて教会で広く受容されている。

6. 結 論

世俗化という単語は、上に述べたように、一般の社会もしくは社会の中の一部が宗教の影響を受けなくなる、あるいはその影響が脆弱化するということを意味する。そのような意味では、この論文の題の「キリスト教における世俗化」の意味が理解しがたくなる。その意味では、宗教自体における世俗化はどのようにありうるか。しかしすでに、この論文の中で、教会に「世俗化」という言葉を当てはめた。それは、中世期において教会があまりにも政治的な権力体制にはまってしまい、まるで世俗

³³ H.コックス著『世俗都市』、38-49頁。

的な存在になったという腐敗を指す意味で使ったのである。

しかし、世俗化（もしくは、secularization）を「来世から現世へと注意を移す」という意味で理解すると、「キリスト教における世俗化」とは意味深いものになる。この世への教会の使命の再確認を意味するものとなるのである。

19世紀において、コントやその他の思想家は「世俗化」という概念を「進歩」という概念と結び付けていた。現世のことに注目する20世紀のカトリック神学者は同様に世界が何らかの方向に進んでいて、何らかの目的に向かっていているという認識を持っていた。シャルダンの認識はこのような傾向の著名な例である。

しかし、現在は進歩への夢の破綻が明らかになっている。進歩と思っていたものが温暖化やその他の環境問題の原因となっていること、進歩がもっとも著しくなっている分野の一つは巨大な無差別破壊力を持つ兵器であること、それに世界の一部の進歩のため、世界の他の部分が犠牲になっていることから、進歩を安易に信奉することの危険性が明らかになっている。神学においても、特定の歴史的動向を「神の国」の実現への発展として同一視することに二の足を踏まざるをえない。しかし、それで人間の救いが来世のみのものであり、教会の使命が来世のみに向けたものだという事にはならない。20世紀において再発見された救いの概念、つまり、救いはこの世の中でも未完成でありながら可能であり、来世における救いはこの世における救いと別個のものではなく、その継続と完成であるという理解は、むしろ聖書と一致する。たとえば、救いを「天にあるもの、地にあるものすべてのものの和解」³⁴と定義したパウロの理解と一致するのである。となると、教会（もしくはキリスト教徒）の使命は何よりもこの世に向けたものであり、その目的はただ信仰の普及に努めることだけでなく、この世における「和解」（明らかに社会問題への取り組み、差別や貧富の差の克服、紛争の解決などを含む）を目指すものである。したがって、このような「世俗化」は聖書の信仰への復帰であり、教会の政治的権力を高めるために利用されていた、ゆがんだ理解の訂正を奨励するものであり、また多くの緊急な問題を抱える現代世界においては不可欠なものである。

³⁴ コロサイ 1.19-20、エフェソ 1.9-10。

キーワード：

世俗化、来世、現世、近代キリスト教、カトリック

KEYWORDS：

Secularization, salvation, the world, modernity, Catholicism